

長楯城跡発掘調査 遺跡見学会資料

～戦国期の秋保氏の居城跡～

仙台市教育委員会文化財課

令和元年 10月 26日

調査の概要

遺跡名	長楯城跡
所在地	仙台市太白区秋保町長袋字館地内
調査原因	市道館国久線拡幅事業に伴う発掘調査
調査面積	約 150㎡
調査主体	仙台市教育委員会調査調整係
調査期間	令和元年 8月 8日～11月 15日 (予定)

仙台市では、秋保総合支所により計画されている市道館国久線拡幅事業に伴い、秋保町長袋字館地内にある長楯城跡で発掘調査を実施しています。

今回の調査では、長楯城跡の主曲輪である「居屋敷」と、「重臣屋敷」を区画する土塁と堀跡を調査しました。その結果堀の一部が埋め立てられ、土橋が構築され、裾部分に石が積まれていることが確認されました。また土塁の表面にも石が積まれていた可能性が高いことが判明しました。



長楯城跡周辺地図 (国土地理院地図、傾斜量図使用)

長楯城跡と秋保氏について

長楯城は名取川と瀬沢川の合流地点に突き出た台地上に所在します。城の北側には二口越えの出羽街道が通り、長袋宿が接しています。また城の内部を通り、南に抜ける道筋 (現在の市道館国久線) は「大手道」とも呼ばれ、川崎方面へ抜ける古い街道と考えられます。城はこれらの街道が接続する部分、交通の要衝に築かれています。また周囲には長楯城の「詰め之城」と考えられる館山城跡をはじめ、街道筋に多くの城跡が存在しています。

長楯城は戦国時代に秋保の大部分を領有していた秋保氏の本城です。古文書などによると、秋保氏は戦国時代には伊達氏との関係を持ちながら秋保の地を領有しつつ、出羽側で領地を接する最上氏とも縁戚であったことが知られています。天正 16 (1588) 年の大崎合戦により、伊達氏と最上氏の関係が悪化した際には伊達政宗から最上領との国境などを厳重に固めるよう指示が出されており、同年秋保方からは「山かたしゅ (最上勢) 101 名を討ち取った」との報告がなされています。また関ヶ原合戦の直前の時期には、伊達政宗から秋保一族で馬場に居を構えた秋保摂津守定重と周囲の伊達氏の家臣たちに対し、もしもの時には近隣に所在する「馬場ノ城」(豊後館) に参集し、城の普請をする際には春秋に一度ずつ勤めるようにとの指示が出されています。

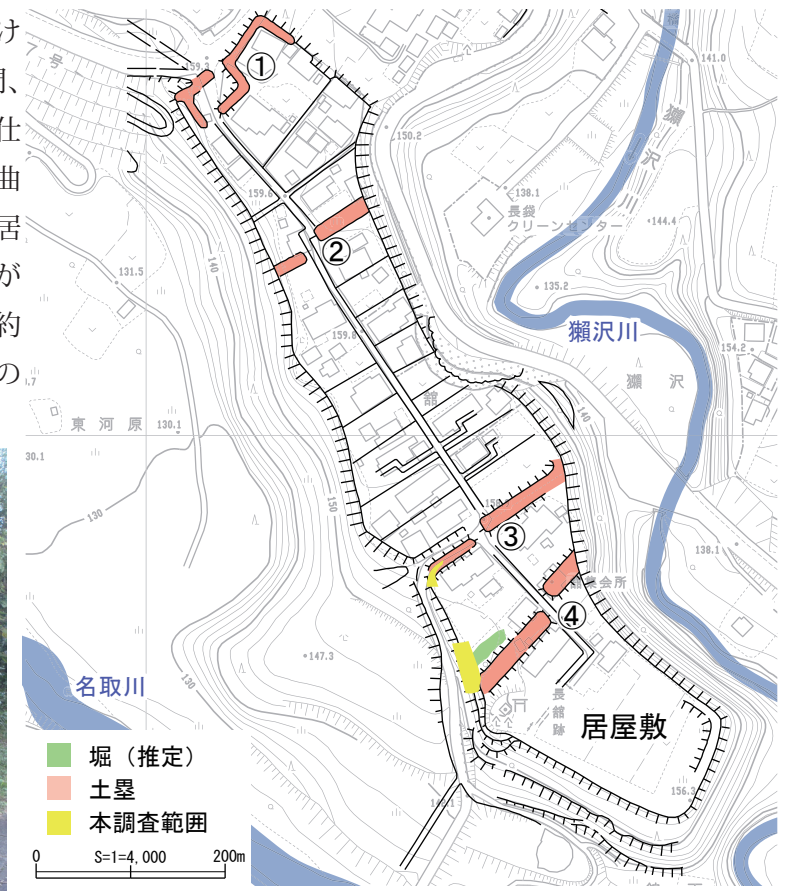
江戸時代の慶長 8 (1603) 年に入ると、秋保氏は蔵王町小村崎に領地替えとなり、秋保は仙台藩の直轄領となり、長楯城も廃城になりました。その後天明年間 (1781～1789) になり、秋保氏がこの地を屋敷地と家中集落 15 軒の「所 (ところ)」として拝領し、約 180 年ぶりに秋保氏がこの地に居を構えました。

城の内部には幅約 5 m の「大手道」が走っており、4 つの曲輪が設けられていました。長袋宿側の曲輪内

の道の両脇には、家臣が居住した「家中集落」があり、最も奥には秋保氏の「居屋敷」が存在していました。「古館記」等には、長楯城は「東西七十六間 (約 137 m)、南北百三十間 (約 234 m)」の規模であると記されていますが、これは城の中心部分である「居屋敷」の規模と考えられています。それぞれの曲輪は、①全体の出入り口の「遠門」、②家臣屋敷の密集する曲輪に設けられた「中門」、③重臣屋敷の曲輪に設けられた門、④居屋敷の曲輪に設けられた門の合計 4 つの門で仕切られていました。また門の両脇に配置され、各曲輪を区画した土塁の一部が現在も残っています。居屋敷が存在する曲輪には、最も大きな土塁 (④) が付随していました。現在見られる土塁の規模は幅約 16 m、高さ約 2.5 m で、今回調査を行ったのはこの土塁の南西側の端部分にあたります。



家中集落内に現存する土塁 (②部分)



長楯城跡・長袋「所」概要図 (『仙台市史 特別編 7 城館』を一部改変)

今回の調査結果

今回の調査地点は、城の南側の「居屋敷」を区画する土塁の南端部に当たります。土塁に隣接する形で、幅約 8.5 m の堀跡が発見されました。また堀と土塁周囲の斜面の法面を埋戻して整地し、堀の端部には土橋を構築し、また土橋の裾部分等には石積みが構築されているのが確認されました。そして土塁の表面にも石積みが見られる可能性が高いことが判明しました。このように大量の石を用いて城の区画施設を構築した例は、近隣の豊後館の「虎口」の「石塁」などでも確認されていますが、発掘調査で確認されたのは初めてのことです。構築された詳細な時期は不明ですが、秋保氏が居を構えていた時期のものと推定されます。

引用参考文献 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編 7 城館』



長楯城跡の石積み検出状況 (南から)



豊後館の虎口の石塁